

## 60 『解体発蒙』に引用される中国医学古

## 典

友部和弘・石野尚吾・花輪壽彦

漢蘭折衷派の医家として知られる三谷公器（一七七四—一八二三）。近江の人。名は僕、号は筌洲、通称は祐吉。公器はその字）は、その著『解体発蒙』（全四巻・付録一巻、一八一三序刊）において、西洋解剖学と東洋医学理論の統合を図った。その評価は、森立之の『素問攷注』に引用されることから窺い知れよう。本書全四巻には、「蔵府前面総図」をはじめ、各臓腑や器官の図が計二九種、収録されている。

一方、東洋医学理論の説明には、『内経』を主に、数種の中国医書の引用がみられる。そこで、ここではその引用状況を調査検討し考察を加えることとした。

各項目別の中国医書引用回数を以下に記す（書名にっいては『素問』は素、『靈枢』は靈、『難経』は難、『甲乙

経』は甲と略記する。『素問』の引用が二回あれば「素二」と記す）。

- 【巻一】〔肺〕素六。靈一。難一。〔喉嚨〕靈一。〔心〕素二。靈五。〔心包〕素二。靈一。難一。〔膈膜〕素一。靈一。【二巻】〔脾〕素四。〔胃〕素一。靈五。〔肝〕素六。靈二。〔胆〕素三。靈一〇。難二。甲二。〔腎〕素七。靈二。難四。甲三。〔臍〕靈五。甲一。〔精室〕靈三。〔子蔵〕靈一。甲一。『千金方』一。『外台秘要方』一。〔胞〕素七。靈一。【巻三】〔膀胱〕素一。靈一。難一。〔小腸〕靈三。難一。〔大腸〕靈四。難三。甲一。『史記正義』一。〔下膈〕素一。〔三焦総説〕素一。靈一。〔中焦〕『経』三。難一。〔下焦〕『経』三。靈一。甲一。〔上焦〕『経』一。靈一。甲一。〔三焦攷証〕靈二。難一。甲一。〔宮衛〕素二。靈一〇。難一。甲二。〔水道〕『経』二。素二。靈四。【巻四】〔経絡〕靈一。〔経脈〕素一。靈三。難二。『史記扁鵲伝』一。〔絡脈〕靈四。『史記扁鵲伝』一。〔経絡攷証〕靈五。『史記扁鵲伝』一。〔刺絡攷証〕素四。靈七。『周礼』一。〔門脈〕素二。〔液道攷証〕素一。靈四。〔脳髓〕素六。靈一。『春秋元命包』一。〔精神解〕素二。靈六。『淮南子』

二。『白虎通情性篇』一。『史記五帝紀正義』一。『左氏昭公七年伝』一。【付録】(肺不可以配秋金攷証)素二。靈九。難三。(肝不可以配春木攷証)素一七。靈一二。『周礼食医』一。『洪範』一。

以上、引用書には『素問』・『靈枢』・『難経』・『甲乙経』・『千金方』・『外台秘要方』・『史記扁鵲伝』など、また医書以外に『周礼』・『淮南子』などがあつた。全四巻には、およそ二二三回、付録には六五回の計、二八八回の引用がみられた。ただ付録は弟子の大寺昆清(玄淵)が公器の口述を筆記したものであり、内容も異質なものであるから、ここでは研究の対象とはしないこととする。

各書の引用頻度をみると、『素問』は約六二回で全体の約二八%、『靈枢』は約一〇六回で四八%となり、この両書で約七五%を占める。特に『靈枢』の引用頻度は極めて高い。その他の書はいずれも一%に満たないが、『難経』と『甲乙経』は、所々で『素問』と『靈枢』の引用条文において、文字の考証資料として用いられている。引用書の最も中核をなしている『靈枢』では、その全八十一篇中の四〇篇からの引用があり、特に宮衛生会十

八・本輸二・経脈十・本蔵四十七・決氣三十・平人絶穀三十二などを多く引く。一方、『素問』では全八十一篇中の三〇篇からの引用がみられ、そのうち五蔵別論十一・経脈別論二十一・痿論四十四などからの引用が比較的多い。

これらの結果より、公器は本書を著すにあたり、『靈枢』を最も多く利用していたことがわかる。このことから、解剖学において『靈枢』の古典的価値が高いものであることが示唆される。

(北里研究所東洋医学総合研究所)